

Ⅷ セルハイ研究開発が教師へもたらしたもの

1 教師間の協力 『昼休みの30分間が教師の意識を変えた』

平成14年度セルハイ1期校への申請後、指定を受けてからの数ヶ月間は、いわば本校にとっての黎明期であった。そのとき早くも本校の研究開発体制は1つ目の大きな転機を迎えた。当時、この研究開発に常時携わる外国語科のスタッフは総勢14名であった。このうち、研究開発実施計画書作成に携わった者が2名。他12名も研究開発計画におけるそれぞれの役割をほぼ等しく分担しながら開発は進んでいるかに見えた。

しかしながら、日常の忙しさと、外国語科の会議を頻繁に開催することが困難である状況に甘んじているうちに、研究開発の方向性のコンセンサスも得られないまま、各々が行事の開催・運営等のみに終始していることが明らかとなった。

この事態の原因は、教員間の共通理解の欠如と一人ひとりの collegiality (同僚間の同等の関係、協同) の低さにあった。「セルハイとは一体何なのか?」「セルハイは本校の英語教育をどう改善するのか?」という全く基本的な議論もなされないまま、事業の説明と計画書にある予定行事の消化、そして報告書作成のための記録等に取り組んでいるだけであった。

このことを解決するために「セルハイ・ランチ」が生まれた。これは、いわゆる「ワーキング・ランチ」である。放課後の会議の定期的な開催は、校務分掌の会議、部活動の指導、生徒への対応等があり、後発の外国語科会議としては不可能であった。そこで、毎週水曜日の昼食時、昼食を持ち寄りながら「研究開発の進捗状況」、「行き詰まって困っているところ」「応援の必要なところ」等の情報交換会及び連絡会を設定した。この「セルハイ・ランチ」の第1回目は、記録によると平成14年7月17日であるから、2年半以上水曜日の昼休みはセルハイ研究開発について話し合ったことになる。平成17年3月で指定期間は終わるが、通算約100回開催している。1回につき約30分の会議であり、レジメもあらかじめ配っておき連絡がある教師は配付資料を用意して、要領よく簡潔にまとめて連絡をする。週1回の開催でも連絡事項や協議事項は毎週少なくとも3~4件はあり、1件にかけることができる時間は平均して5分~10分程度である。

しかし、このことが教師集団を変えた。雑件ばかりに見えるこの会議も、「セルハイ研究開発」というテーマのもとで全員が率直に意見を出し合い、共通理解をしていた貴重な30分であった。やがて collegiality が芽生え、本校の研究開発は外国語科教師全員の協同作業として前進していったのである。

2 教師間の連携 『それぞれが受け止めた研究開発の重み』

研究開発において問題としている事柄への collegiality, 研究内容の共通理解は、前述のような経緯を経て深まっていった。その背景には、もう一つ副次的な効果が生まれていたことも見逃せない。教師間の連携である。

平成14年度にセルハイ校として全国で16件、18校が指定されたが、先行事例の無い1期校にとって、計画書において掲げた研究開発課題をどのような実践を行い解決していくかは、まさに暗中模索の状態であった。

しかしながら、前述のように「セルハイ・ランチ」を設けることで、教師の意識が変わり協同作業を伴いながら研究開発は進められたのであるが、それぞれが割り当てられた別々の研究開発に関わる事項のみを抱えて協同していたのではない。チームのリーダーはいるものの、一つの事項に携わる複数の教師のうち一人ひとりが、研究開発そのものの重みを同じように受け止めていたのである。collegiality とは、このように皆が同じ重みを感じているということであり、負担軽減という発想からは決してこうした感覚は生まれてこない。

そうであればこそ、縦糸となる様々な研究開発の内容に横糸として教師全員が関わることができたのである。また、この横糸は本校の教師だけではなく、そうした重みを同じように受け止めていただいた運営指導委員の先生方にも研究開発の横糸となっていた。幾度となくお願いした校内研修への講師依頼、ITC への泊を伴う参加、突然の資料分析依頼、報告書への執筆依頼等、研究開発の本質的かつ実務的な側面において、深く関わっていただいた。また、県教育庁指導課の白神敬祐指導主事、県教育センターの小寺邦彦指導主事には、ほぼすべての運営指導委員会・公開授業に参加していただいた。その際、指導・助言だけでなく、運営指導委員の方々にそうしていただいたように、あたかも本校の教員として研究開発に携わるかのようにご尽力をいただいた。改めてお礼を申し上げる次第である。

3年間をかけて縦糸と横糸が織りなした教師間の協力・連携の成果を、本報告書のような形で示すことができたのは、まさにこうした集団の力である。そして、この集団の力が報告書を通して、日本の英語教育改善を少しでも後押しすることができれば幸いである。

本報告書は本編と資料編に分かれている。資料編には授業改善に用いたシラバス、学習指導案、生徒への配布資料等を、そのまま掲載している。利用にあたっては特に制約は設けていない。先生方の指導の際に少しでもお役に立てれば幸いである。

3 研究開発に携わったもの

小橋 雅彦	*セルハイ研究開発責任者
小山 敬一	*セルハイ研究開発責任者
岸本 史雄	シラバス研究開発責任者
荒井 慎也	スピーキング評価方法研究開発責任者
入江 健二郎	ITC 実施責任者, GTEC 実施責任者
佐野 康彦	英語学習に関する意識調査責任者, ITC 担当, シラバス研究開発
小林 秀州	GTEC 実施責任者, 英語学習に関する意識調査担当
杉岡 和子	公開授業運営責任者, シラバス研究開発
加藤 信栄	シラバス研究開発, スピーキング評価方法研究開発
ノリス 明美	スピーキング評価方法研究開発, ITC 担当
大森 優子	スピーキング評価方法研究開発, 英語学習に関する意識調査担当
小橋 勝利	GTEC 実施担当
Anna Woods (ETI)	
Woodrow Peterson (ALT)	ITC 担当
Anne Etheve (ALT)	ITC 担当
Jason Williams (非常勤講師)	
青山 聡 (平成 14, 15 年度)	G. E.・遠隔英会話授業担当, スピーキング評価方法研究開発
藤原 智 (平成 14 年度)	シラバス研究開発
石原 律子 (平成 14 年度)	シラバス研究開発
土山 佳代 (平成 14 年度)	ITC 担当
Bryce Woodley (ETI)	(平成 15 年度)
Ololade Adekanmbi (ALT)	(平成 14, 15 年度)
Julien Rudin (ALT)	(平成 14, 15 年度)
Orlando Williams (Specialist)	(平成 14, 15 年度)

*「セルハイ研究開発責任者」は、シラバス及びスピーキング評価方法の研究開発、ITC の企画運営等に参画し、セルハイ研究開発全体の総括をする。

岡山大学教育学部英語科教育教授
高塚 成信

平成14年度から16年度の3年間私は、岡山城東高等学校の先生方と SELHi 運営指導委員という立場で関わらせていただき、大変多くのことを学ばせていただきました。ここにその成果と課題について簡単にご報告させていただきたいと思います。

(1) 成果

SELHi 研究指定1期校として分からないことが多い中で、学校全体として *collegiality* (同僚間の同等の関係, 協同) を確立して研究開発課題に取り組み、以下のような素晴らしい成果を挙げられました。詳しくは該当ページをご参照ください。

1. 英語各科目の目標設定, シラバス, 評価規準・基準の作成
2. シラバスに基づく工夫満載の授業と評価規準・基準に基づく評価の実施
3. スピーキング能力テストの開発と実施
4. 確かな英語学力の保障

(2) 課題

これらの成果についてはこれまで、授業公開, 英語教員研修, 研究成果発表大会など様々な機会を通して地域に還元していただいているところですが、さらなる教育資産の共有化のために、今後とも次のような課題に取り組んでいただくことを希望いたします。

1. order & sequence

スピーキング能力を養成するためのタスク, 例えばスピーチ, ディスカッション, ディベートをどのような順序 (*order*) で練習していくことが効果的なのか, また, それぞれのタスク内でどのような練習の段階 (*sequence*) を設定することができるのかを具体的に示すこと。それによってより広範な学力レベルの生徒への対応方法が見えてくるのではないかと思います。

2. improvisation

スピーチやディベートなど, ある意味で *formal* で *planned* なものについてのみならず, 即興の (*improvised, unplanned*) しかも意味の交渉が頻繁に起こる *informal* なインターアクションができる能力をつけるためのタスクについてその内容を示すこと。

3. feedback

生徒のタスクパフォーマンスに見られる言語的, 内容的に不適切なものに対して, 教師にはどのような具体的な訂正やアドバイス (*feedback*) が可能なのか, また必要なのか示すこと。

4. individual differences

学習上の問題を抱えている生徒への対応がどのように行われているのか示すこと。そのような情報はきっと他の学校で役立つと思います。

研究開発指定の終わりが関係の終わりにならないよう、岡山城東高等学校の先生方とは今後とも英語授業のあり方について一緒に考えさせていただければありがたいと思っております。先生方をはじめ、県教委の先生方及び運営指導委員の先生方に対して、この場をお借りしてお礼申し上げます。3年間ありがとうございました。そして今後も宜しく願いいたします。